

## 映像にみる意味指数の変化

城西大学女子短期大学部

平澤 洋一

文章は言語情報・非言語情報などの連鎖であるが、映像も同様な構成によって意味が流れているのであろうか。NHK『小さな旅』を調査例にしてコミュニケーション指数をもとに分析する。

### 1 はじめに

文章は「文化指数」「成立条件指数」「言語指数」「心理指数」「非言語指数」を総体化したコミュニケーション指数の流れとして把握することが可能であるが、映像の場合にも同様な現象が見られるのであろうか。また、言語指数と非言語指数の相関性や重要度の違いは、どの程度なのであろうか。この疑問を明らかにするため、調査を実施した。被験者に外国人が含まれた調査なので番組の選定に苦しめられるところであるが、多文化調査の一貫として平成4～5年に『小さな旅』（平成4年4/30、5/7、7/23および12/10放送分）、『金メダルへの道』（平成4年7/23NHK放送分）、『西田ひかるの痛快人物伝』（同5/7NHK放送分）、ニュース番組（同4/11、7/23、12/10、平成5年1/7）を調査したことがあったので、調査結果の比較という目的をもちかねて、今回は『小さな旅』（平成4年4/30NHK放送分「残雪はるか城の春——信州松本市」）を調査例にして、映像におけるコミュニケーション指数の動きと認知の問題について考察してみたい。『小さな旅』はいずれも日本文化を反映した興味深いテーマを追っていたが、4/30のものに最も顕著な認知差が観察された。番組調査の被験者は平成5年1月が別科生27名+短大生80名、平成6年5月が短大生55名、平成10年9月が別科生20名+短大生40名、計222名である。

### 2 調査番組の構成

今回調査した『小さな旅』（26分40秒）は「題名タイトル」「16の小話」と「ENDタイトル」で構成されている。

- (1) 題名タイトル、タイトルバック。
- (2) 早春の松本城。
- (3) 土蔵を改造した商店街。
- (4) 手鞠を作る。昔ながらの手作業。色鮮やかな手鞠ができあがる。
- (5) 女鳥羽が流れる。
- (6) 豊かな湧き水。女たちが物を洗っている。生活の水が活きている。
- (8) 本陣「村井宿」。伝統がずしりと重い。
- (9) ちょうちんを作る職人。
- (10) (14分30秒) 夕焼けの松本城。湖面に夕日が美しい。
- (11) 豊作を祈る鳥居火。
- (12) (暗から明に画面が一転して) 女鳥羽川の源流、岸辺に花々が咲く。

- (13) (17分29秒) 桜の花がたわわに咲いている。花の下を園児たちが歩いてくる。
- (14) 鮎作り。職人の技。
- (15) 桃の花が咲く。
- (16) 桃味噌（花味噌）を作る職人。
- (17) 苗代を作る。
- (18) ENDタイトル、タイトルバック。

### 3 調査結果

この作品が「おもしろかった」と答えた被験者の数は、予想して歌よりは多かった。しかも評価は5段階の4と5の回答が圧倒的であった。これは『小さな旅』全体のもつ優れた構成力、語り、カメラワーク、音楽などが学生たちに高く評価されたからである。4または5で評価づけた学生たちに理由を求めると、こんな理由が上位を占めた。

- 1 画面に変化があるから。
- 2 語り手がいいから。
- 3 自然がすばらしいから。
- 4 出てきた人たちの印象がいいから。
- 5 背景音楽がすばらしいから。
- 6 いつも観ているし、おもしろいから。

次に「おもしろかった」が「つまらなかった」より多かったのは、前出(1)～(18)のうち、(2)早春の松本城、(4)手鞠を作る、(9)ちょうちんを作る職人、(10)夕焼けの松本城、(12)女鳥羽川の源流、(13)桜の花がたわわに咲く、(16)職人が桃味噌を作る、の7場面であった。(2)、(10)、(12)、(13)は、いずれも色調の非常に美しい情緒的な自然を捉えた画面ばかりである。(15)の桃の花は、やはり桜ほどには共感を呼ばなかった。(4)、(9)、(16)は学生たちに新鮮な印象を与えたが、同じように働く人の姿を映していながら、(7)わさび田で働く、(14)鮎作りの職人、(17)苗代を作る、のような画面にはほとんど興味を示さなかった。これは、視聴者の印象を新鮮化する「シーンの転換」「小話の転換」「飛躍」など、「新鮮化指数」(後出)と名づけた意味特徴群の構成がインパクトと起伏に欠けていたからである。

### 4 コミュニケーション指数の分析

題名タイトルの中に「残雪はるか」「城」「春」「信州松本市」という重要な語句がこめられており、「残雪はるか」と「春」から「浅い春」、同内容表現の「城」「信州松本市」から「松本市」が被験者に認知されたであろう。いうまでもなく「浅い春」は「時」を「松本市」は「所」をあらわしていて、この二つの意味特徴はこの番組の最初から最後まで一貫して関与的である。そして「誰」や「何」にあたる行動主体や変化主体がいろいろ登場してくる。いろいろということは、行動も変化もさまざまなバリエーションを有して姿を変えながら番組の中を流れていくわけであり、これを意味論の視点から見れば、映像の流れは意味特徴の束の流れとして捉えることができる(意味特徴の総体として捉えようとするかぎり、両者は近似的にはなるものの、もとより意味量は完全には一致しない)。このようなことが起こるのは、被験者たちの映像理解の深層に、新たな認知や感情の起

伏をもたらず「何か」が存在するからである。そしてその「何か」には、「時」「所」「行動主体」「変化主体」「色」「音」「歩く」「回す」「流れる」「揺れる」……、実に多くの意味特徴の束と関係している。具体的には、次のような意味特徴である。

A 送信者指数 = あらわれない。

B 文化指数 = 異文化度、異言語度、位相性（幼児向け、若年層向け、中年層向け、老年層向け、男性向け、女性向け……）、支配コード（日常コード、論理コード、評価コード、感情コード、回想コード、想像コード、未経験コード、文芸コード、歴史コード、文字コード、音声コード、映像コード）。

C 成立条件指数 = 時、所、動機・目的、主体、焦点主体、対象1（広対象）、対象2（広対象の一部をなす狭対象）、共起対象（主体・主対象の価値や情緒性などを上下させる役を担う対象）、伝達ジャンル（日常会話、仕事、儀礼、娯楽……）、言語機能（外語、外内語、内語、非言語）、主体の判断、場面心理（改まり、感動……）、メディア（文字、音声、映像）、伝達内容、表現の調子（改まって、くだけて……）、言語規範（共通語、方言、話しことば、散文調）、作品規制（カメラワークなどでの制限、時間的長さの制約……）、伝達規制（特定時、フォーマルに）。

D 言語指数

(1) 音韻指数 = 音素類型（現代、東海東山道方言型）、モーラ数、音節構造（現代、東京方言型）、アクセント類型（現代、東京式）。

(2) 文法指数 = 構文構造複雑度（連体修飾文構造、連用修飾文構造……）、格（時格、所格、行為者格、経験者格、対象格、起点格……）、強め形式数、主文テンス（完了、未完了）、アスペクト、ムード。

(3) 意味領域指数 = 知的意味領域、文法的意味領域、文体的意味領域、評価的意味領域、感情的意味領域、位相的意味領域、地域的意味領域、文化的意味領域。

(4) 語彙指数 = 天空語彙、天候語彙、季節語彙、時刻語彙、地語彙（山、川、湧き水……）、樹木語彙、花語彙、形状語彙、色彩語彙、人間語彙、行動語彙、変化語彙、評価・感情語彙。

(5) 評価・感情性 = 評価・感情度。

(6) 文体指数 = ジャンル、モチーフ（テーマを描く角度）、物語性（多話性をもつ）、直叙性、視座（共同体などに対する制作者や表現主体の関係のし方、例えば共同体の話者・語り手・ナレーションと制作者の目の一致しているところがある）、視点移動性、言語規範（時代的規範、作品類型的規範……）、一文中の名詞数、人格語、語り手による文、登場人物の心情を述べる文、時制形態、サマリー、シーン、場面展開、会話、一文の字数・モーラ数、スーパーインポーズの漢字、語彙表記（明治普通文体、会話体）、対者待遇（丁寧度、2だ体、3である体、4です体……）、素材待遇（尊敬、謙譲）。

(7) 表現指数 = 感覚型表現（視覚法、聴覚法……）、散文型表現、一般型の表現（省略、抽象化……）。

(8) 接続指数 = 接続相手（対立枠、転換・飛躍枠、カット、シーン……）、接続方向（順接、逆接、同内容……）、接続方法（指示語、同一語句、類語語……）、主題文指数。

(9) 新鮮化指数 = 小話の転換（小話の転換によって当該場面への倦怠性がなくなり視聴者

の心情が新鮮化されるので〔+3〕を与える）、飛躍（場面が急展開し視聴者の心情が新鮮化されるような時に〔+5〕を与える）、シーンの転換（段落や話題転換に比べるとたびたび変わることが多いし視聴者が転換を意識しないくらいのもものも結構あるので、段落よりは度数を低くとる必要がある）。

(10)遮断指数 = FO（意味の連続性が遮断され、成立条件や話題がまったく新しく始まるような時に暫定基準として〔-10〕を与える。この処置によって、コミュニケーション指数が新しい度数からスタートできるようになる）。

(11)倦怠化指数 = 画面や手法が洗練されており、倦怠感を誘うような同一語反復や同一手法反復数はまず観察されなかった。

E 心理指数 = プラス心理指数、マイナス心理指数、中立心理指数。

F 非言語指数

(1)周辺言語指数 = 音質、訛音、聞きやすさ、強弱、テンポ、つなぎ音、笑い、沈黙・間、流暢さ、物音、イントネーション……。

(2)環境指数 = 対人距離、対面性、色彩表現性、感触……。

(3)身体信号指数 = 性、年齢、職業、皮膚の色、親密度、好感度、体型、姿勢、顔だち、髪型、目つき、視線の方向・動き、表情……。

(4)変化・行動指数 = 方向、角度、状態（笑顔で、一直線に、打ち込んで、爽やかに、美しく……）、行動・変化の重要度、速度、調整動作、しぐさ、身ぶり、動作指数（移動する類、曲げる類、伸ばす類、回す類、5立つ類、座る類……）、変化指数（変化する類、出会う類……）。

G 受信者指数 = あらわれない。

## 5 多文化認知との関連

番組の視聴者たちは、無意識にはあるが、番組を見る時にはすでに自分の内部に自らの認知類型ができあがっていて、その認知の枠をとおして映像を見ているものと思われる。例えば、この番組の場面(1)～(18)の中で学生たちが「おもしろい」と回答した(2)早春の松本城、(4)手鞠を作る、(9)ちょうちんを作る職人、(10)夕焼けの松本城、(12)女鳥羽川の源流、(13)桜の花がたわわに咲く、(16)職人が桃味噌を作るという7場面では、「厳しく長い冬を終えて春を迎えた信州人のよろこび」「生活の動き」「日の光」「赤」「黄」などが見事な手法で使われ、学生たち個々人の複雑な認知構造が「城」「春」「月」「夕焼け」「桜の花」「桃の花」などに顕在化しているようである。「夕焼け」にしても「桜の花」にしても、その人その人がそれまでの人生で見聞きしてきた夕焼けの風景・色彩・事情・心理などが総合化された意味（＝経験的意味）が異なるので、『小さな旅』の松本城の夕焼けという同じ画面・対象を見ているのに、プラス感情にとったりマイナス感情を抱いたりし、さまざまな表象を浮かべることになる。そして、この種の表象が何度か重ねられて、番組や作品に対する最終的な評価が形成されていく。